

不撓不屈の英雄を跪かせるには【完結】

チキン丸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界の果てで少年は人知れず偉業を成し遂げる。これはひとりの少女を救うために立ち上がったとある若人の物語。

全四話です。

以前投稿していた分を書き直したものです。

目次

第4話	第3話	第2話	第1話
39	23	11	1

## 第1話

英雄、と一口に言っても様々な形がある。

世界に散らばる英雄譚の数々……神話や民話、寓話のなかで輝きつづける英雄たちの物語は、どこか似通った部分はあるけど民族、環境、宗教、時代によつて左右されひとつひとつどこか違った輝きを放つ。

英雄譚は人間がいれば必ずと言つていいほど存在し、世界を天蓋とするかのように燦めいて、人々を魅了してきた。

それは幼い俺の心を搔つ攫つて、いまだに戻つて来ていないほど強烈な光だった。

少し掬つて見るだけでも英雄は十人十色だ。

まずはギリシャの英雄ペルセウス。これは分かりやすい英雄だ。生け贄を求める怪物を颯爽と現れた英雄が討ち果たす……ペルセウスIIアンドロメダ型とすら呼ばれるほど典型的な英雄で、だからこそその勇名は今なお世界に轟いている。

おつぎは日本が誇る大英雄ヤマトタケル。彼も高貴な身分でありながら諸国を流浪し艱難辛苦を乗り越えて偉業をなした。まさに英雄のお手本というべき存在……けれども彼は絡め手だまし討ち上等な煮ても焼いても食えない奴で、前述のペルセウスからしたら少し腹黒い。

今挙げた例はまさに英雄と手放して呼べるものたちで、他にもバドラズやオデュッセウス、桃太郎……この類の英雄こそ真の英雄であり最大手だろう。

けれど力こそパワー！ や、勝ったやつが正義だ！ みたいな武の英雄もいれば正攻法から外れた英雄だつて存在する。

ロキやヘルメスといった狂言回しや人間に火を与えたプロメテウスのような文化英雄だつて英雄の一側面だろうし、ルシファアのようなアンチヒーローと呼ばれる者たちもいる。

だけど虎穴に入らずんば虎子を得ず。

これらの英雄にはみな、苦境と大敵がともにあり、須らくなにかしらの偉業を成し遂げた実績があった。それを以つて彼らは英雄へと

迎え入れられたのだ。

そんな英雄譚を読みときページをめくるたびに、俺の胸の高鳴りは収まりきれず、現実のことさえ忘れて読みふけて、しばしば夢想の世界に降り立っては共に冒険の旅へ繰りだした。

敵をばっさばっさと薙ぎ倒し、讃えられる。誰もが一度は憧れる夢。

そしてそれを夢想だけで終わらせたくなかった。

現実でもスタミナを付けるために走り込みはもちろん、道場に忍び込んで弓を引いたり、台風で氾濫する河川に飛び込んだり……物心ついたすぐだから四歳のころから始めたんだっただか、気付けばそんなバカな事を十年も続けていた。

振り返ってみれば失笑しそうなほどバカな行いだったけど、楽しかった。

初志貫徹は座右の銘で、一度決めたことはやり通す主義なものもあるが、なによりも楽しかった。でなければこんな長い時間、いつそ無駄といえる事に費やしちやいない。

俺はいつか偉業を成し遂げ、英雄になってやる。山のとっぺんで叫んでは曇りのない空に謳いあげるほど、心に迷いはなかった。

そしてそんな生活を続けていた十四歳になって迎えた二月の初めのことだった。

見ず知らずの世界に迷い込んだのは――。

「タカシ今日の狩り、怪我はなかった？」

「イオ」

雨の匂いが鼻孔をくすぐり晴れた日の水たまりを思わせる声にふり向けば、そこにはひとりの少女がいた。

清水がさらさらと流れるような青い髪。

瞳は春の野をいろどる菫のそれ。

そして髪の間隙からのぞく彼女の耳はツンツと尖っていた……。

ただの少女では決してない。決してコスプレなんかじゃない純正の……日本人どころか世界中をさらいだしてもあり得ない髪と耳を持った少女。

……水を掬って命を与えれば彼女になるじゃないか？ そんな思いつきすら抱かせるほど清らかな少女だった。

彼女はイオ。イオ・リビュエー。

いま現在居候させてもらっている家のたったひとりの同居人である。

これで何度目か、彼女の容姿に見惚れそうになっていた心を糺して問われていたことへの返答をする。

怪我なんてないと否定するように軽く首を振って、今度は背中に吊っていたキツネを見せた。

するとイオは破顔して我が事のように喜んだ。

「よかったあ……タカシがはじめて一人で行く狩りだったから心配だったんだ。だってこの森は熊やグリフォンみたいな危険な動物たちがたくさんいるでしょ？ 私だってここにずっと住んでたけど危ない目に何度もあつたし、タカシがそうならない保証なんてどこにもないもの。……でも怪我もないみたいだしそれどころかこんな立派なキツネまで獲ってくるなんて……ホントにすごいよ」

「そうか」

狩り一つでここまで褒められてしまうとは思わなくてそっぽを向いてしまった。

そもそも俺はまだ偉業を打ち立ててはいないが英雄なのだ、これくらいできて当たり前なんだ、と心のなかでなにかに弁明さえしてしまった。

けれど褒められるのは嫌ではないので静かに頷いた。

「私の調子がもうちよつと良かったらタカシと一緒に行けたのに。ごめんね」

そんな事をいうイオに俺はバカをいうな、と強く首を振った。

彼女の言うようにイオと生活しはじめて二、三日たったところから彼女は体調を崩すようになった。

最初はそうだったわけではなくて、出会って数日はイオも一緒に狩りにでたり、外を駆けまわって弓の手ほどきを受けたり、一般的な健常者以上に活発だったのだ。

でもいまは家から少し歩いただけで限界だった。

「情けないなあ……ホントならタカシとそれにどっちが狩りが上手いとか色々競争してみたかったのに」

切り株の上で大人しく座るのは裏腹に彼女の表情は忙しなく百面相をしていた。

「気にするな」

俺が付いている、そう言いたかったがなかなか不便な舌は思うように動いてくれなかった。

どうも気障っぽい台詞は口が受け入れてくれないらしい。もともと寡黙で口下手なやつが気の利いたことを言おうとするから拒否反応を起こしているらしい。

要修行だな。

一英雄として気の利いた台詞くらい言えなくてどうする。英雄色好むの諺があるように女性の扱いに関して巧みでなくてはいけなのだ。

「戻ろう。手を」

「うん。ありがとう」

口がダメなら身体で動くしかない。イオの背中と膝裏に手を回し……お姫様抱っこの恰好で持ち上げ、ゆっくりと歩きだした。

イオ・リュビエー。この腕の中に抱く少女こそ、いま現在居候させてもらっている家の同居人であり、この世界で出会った唯一の人間だ。

俺がこの世界に来た理由は分からない……意識が断裂し、気付けばここにいた。

目覚めた場所はイオの家で、その時はまだ元気のあった彼女が俺を

引つ張つて家まで運んだらしい。

元の世界は真冬だったはずで……けれど目が覚め外に出てみれば花々が咲き誇っていて、すぐに元の世界じゃないと察した。

異界の法則は季節のズレだけでなく、さつき狩りにも出た、家からすぐ近くの森にも巢食っていた。

森の異常はわかり易いもので、驚くことにどれだけ進もうと森を抜けることが出来ない踏破不可能な森だということ。

この目に見える“異常”に困惑と恐怖を覚えはしたが、結局それ以外に害はなく、イオ自身も疑問に当然のことのように笑っていたから、なんとか受け入れることが出来た。

他にも枯れることのないすみれが咲く丘に、元の世界には存在しないグリフォンをはじめとした怪物。そしてイオもまた雨を呼ぶという異能を持っていた。

正直、心踊った。

なんせこれほどの非日常、英雄志望の俺にとって力を試す絶好のチャンスだと思えた。ここで何かを為すために遣わされたのだと本気で思いやした。

ああ、いまにして思えばなんて自意識過剰。そんなの幻想だった。現実には迫りくる試練も強敵もなく、ただ日に日に弱っていく少女を手も足も出せず、見守る事しかできないのだから。

さく、さく、と小気味よい音をたてながら緑一色の原野を歩きすむ。羽根のように軽いイオをせおって向かう場所は、彼女のお気に入りの場所だ。

柔らかな風に不枯のすみれの花吹雪が舞い、丘の頂上でひっそりと佇む大岩があるだけの殺風景な場所。

日本でも田舎を少し探せばどこにでもありそうな場所で、だからこそ立ち止まり惚けたように見入ってしまったえそうな……そんなノスタルジックな場所だった。

そこが彼女のお気に入り場所だという。  
良い所だ。



何度か来ているはずなのに見た瞬間、そんな稚拙な言葉が零れてしまふ。

「やっぱり良い場所だよ、ここ」

背の少女の声にゆっくりとうなずく。

持ち前の健脚でなだらかな丘を登りきると、しめ縄をまよえばすぐにでも御神体として奉られそうな大岩が現れる。この大岩もなにかの力を秘めていそうだが真偽のほどは分からない。

大岩のちかくで腰を下ろし、火を起こす。火を起こすのも手慣れて、ここに来たすぐはずいぶん手間取ったものだ。

温めた白湯をさしだして、一息つく。

そうすると自然の生みだすぎわめきで世界は満ち、かつていた世界の喧噪は皆無なことに気付いてしまふ。ふと、寂しさが去来してしまふほどに。

「ねえ、タカシの元いた世界ってたくさんの人がいたんだよね……それも数え切れないくらい。夜だって暗くならないくらい灯りが満ちた世界だったんでしょ？」

「まあ、な」

「いいなあ賑やかそうで。タカシが来るまで私はずっと一人だったから羨ましい」

大岩に背をあずけ、となりに座るイオはつぶやくような声量で声を落とした。いつもは好奇心旺盛に輝く董色の目は、いまは揺らめく橙の影であった。

「此処だってね、いまは私以外誰もいないけど数十年前までなら私の一族……リユビエーの一族はもつとたくさんの人が居たらしいんだよ。でもしきたりで皆あの山の向こうに行っちゃたんだって」

それは何度か聞いた話だった。以前は数百人はいたらしいイオの一族はしきたりによって年々数を減らしていき、いまはイオしかいなくなつたという。そのしきたりとは……

「……10年に一度、どこかへ移住するんだったか」

「うん。理由は知らないけど10年間に一度、1人……多くても2人ずつ。此処を離れて山の向こう側へ行っちゃうしきたりがあるの」

イオはそう言つて、ここから数十キロ先にあるまるでアルプスにありそうな山嶺を指差した。この丘以外はなだらかな原野がひろがるばかりだから、門のごとくそびえ立つ高峰はよく見えた。

まるで神々の住まう場所、といわれても違和感のないほどの威容を放つ山はその先に本当に人が住める場所があるのか疑問が浮かぶほど峻険であった。

「それで少しずつ少しずつ、人が減っていつちやつて今はもう私だけが残っちゃつた。そしてそれは私も例外なくやらなきゃいけない事」「イオも、か」

「うん。私が十四になったらちようどその時になるの……だからここに居られるもあと一週間くらいかな」

「そうか」  
「あ、でもそつか。そうしたらタカシが一人になっちゃうね……ここにいた方が元の世界にもどる手がかりも見つかるとも知れないけど、誰も居なくなっちゃう……どうしよう」

「その時は、付いていくさ。戻る手がかりも探してはみたが、ここらには有用そうな物はなかったからな。そのしきたり二人までなら行つていいんだらう?」

「ホント? よかつたあ……ちよつとだけ不安だったの、ずっと準備はしてたけど此処を離れてあの山を登れるのになつて。でも、タカシが居てくれればなんとかなりそう」

少しだけ、安心した。最近ではすっかり見せなくなった心からの笑顔がイオが浮かべていたから。

俺なんか旅についていくことで、彼女が安心を得れるのなら元の世界にもどるなんて二の次だった。

それに元の世界にもどる手がかりも、山の向こうか行く途中に見つかるかも知れない。見つからなければ彼女を送ったあとで戻つてきてもいい。今の俺は根無し草の風来坊、どこでも行ける。

「そしたらタカシも向こうでお母さんにも会えるね。二人で会おうね。……ふふ、楽しみだなあ」

そう言つてイオはおもむろに古びた本を取り出した。彼女の母が

残し、彼女がこれまで生きてこれた知識や常識が詰まってる、彼女の母のよすがたる宝物だ。

「イオはお母さんっ子だったな」

「うん。私を産んですぐ山に向こうに行っちゃったらしいから、もう10年は会ってないんだけどね？ お母さんといた時は幼くてあんまり記憶はないんだけど、でもあの抱きしめてくれた熱はまだ忘れてないよ」

「そうか」

イオの母の愛情は深いのだろうと、他人の俺だつて察していた。

手記の中には羊の管理の仕方、裁縫のやり方、狩りのやり方が事細かに書いてあり、それだけで一財産となった。他にも狩りができない幼いイオが食うに困らないよう潤沢な食糧や薪などの品々だつて用意してあつたのだ……並大抵の苦労ではないだろう。

手記の中には知識だけではなく諦めずに生きなさい。手を取り合える友達を作りなさい。最後の一つは……「ふふっ、なーいしょー」そう笑つて教えてくれなかったが、一番守らなきゃいけない三つの約束事があり、それを守ればいつか母に会えるとイオは信じていた。

手記は異世界よろしく未知の言語で書いてあり、当然のように読めなかった。喋るのはできるというのに文字が読めないとは、送り込んだものがいればアフターケア適当すぎではないかと文句を言いたかった。

母を思い出し、嬉しそうに笑うイオにこちらももつとい口元が綻んでしまう。

けれどイオの一族のしきたりの意味は計り知れないほど重そうだった。

これほど子供想いの母が、子供を置いてでまでやらなきゃいけないしきたりなのだ……相当重要な意味があるのだろう。

イオたちは俺のような極一般的な人間にはない特徴がある。それは尖った耳や青い髪のような身体的特徴だけではなく、彼女たちの内包する呪力という未知の力をつかい、願えば好きなときに小規模な雨を降らせることすら出来るのだ。

明らかに人外の域であるそれをどうにかする為にしきたりと言う形で残ったのかも知れない。現実でもそういう類の話は枚挙にいとまがない。

「それにしても10年に2人ずつ、か……。一度に移動すれば、イオも一人にならずに済んだはずだが……。なにか理由があったのか？」

「それはわかんないよ。お母さんの残した手記にはしきたりのこと自体書いてなかったし……。詳しい事はゼーんぜん」

ん？ と、そこで疑問をおぼえた。

「手記に書いてないならどうやってしきたりのことを知ったんだ？」

「え？ えっと、たまにね頭の中に言葉が降ってくるの……。たぶんお母さんの声。しきたりの事もそれで教えてくれたんだ。私が幼いころもどうすれば分からない時に導いてくれて、なにになににささいとか具体的なことも、清い心を持ちなさいーとか抽象的なことも色々教えてくれるの。あ、もしかしてこういうのもタカシたちにはない事？」

「……ああそうだな。イオのやっているテレパシーか？ は概念はあるが俺たちにはできないものだな」

「そうなんだ……。タカシと出来るかなと思ってたからちよつと残念」

やはり異世界よろしく、俺たち人間には不可能なことをやってのけるから恐れ入る。でも、驚きはしたが倦厭する気持ちは湧いてこなかった。

元々異世界だと分かっていたし、イオが普通でないことは雨を呼んだ時点で十分に思い知っていた。

ちなみにさつき試してみたが電気が走ったような頭痛がしただけだったから俺に出来ないのは変わらなかった。

イオは視線を山の稜線に向けた。いつの間にか空の紅玉が稜線の先へ落ちようとしていた。

「ちよつとタカシが来てからかなあ最近降ってくる言葉の頻度増えたんだよ？ きつともうすぐ会えるって事なんだと思う」

「あと一週間、そう言ってたな」

「うん。最近ちよつと体調崩しがちだけど、タカシが居てくれれば

山の向こうにだって行けちやいそう」

「ああ、俺に任せておけば問題はない」

胸を叩いて言い切るとふふつとイオは安堵と愉快さの入りまじった笑いで答えた。夜のとぼりが降り、彼女の瞳の橙が濃くなっていた。なぜかそれが不安を掻き立てて仕方がなかった。

「しきたりは、絶対なのか？ 時期をずらすとか、いつそのこと辞めたりはできないのか」

思わず突いてでた言葉はそんなものだった。

「ううんダメだよ、それじゃあお母さんに会えなくなっちゃう。お母さんの声はね、私が言いつけを守るいい子でいれば必ず会えるって言ってたから……だから私はいいい子で居ようって決めたの。だから、守らなくちゃ」

「だが幼いイオを置いて行ったんだろう。恨んでは、いないのか」

「恨んでなんか……ないよ。小さい頃は大変だったけど……今だって声も聞こえる、この手記だってある、あの時抱きしめてくれたぬくもりも嘘じゃない。だから見捨てたなんて絶対にない。あるのは会いたいって気持ちだけだよ」

そう言つてイオは遠くに聳える山嶺を眺めては目を細めた。

「私はいいい子でいれば絶対お母さんに会えるって信じてるからいい子でいれるよう頑張るの」

身体が弱りはじめているというのにそう力強く言い切る彼女は、美しく、危うくて、そしてとても尊いものを持っているように思えた。

俺にはそれがひどく羨ましくて仕方がなかった。

## 第2話

「この世界で危険なもの？」

「ああ」

それは一日のルーティンワークを終わらせ中天に輝いていた日が傾きかけたころ。てきぱきと外出の用意をしながら、ふと気になった疑問をベッドで横になるイオに問いかけていた。

なんでそんなことを？ と小首をかしげるイオに、少し頬をゆるめながら話し始めた。

「俺も旅に付いていくことになっただろう。だから、なにか不測の事態があつてはいけない。対策を立てておきたいのさ」

「あ、なるほど。ありがとう、気遣ってくれて」

「自分のためでもある気にするな。……この世界じゃ見たこともない生物がいるからな……」

「ふふ、でもあんまり気にしなくていいよ。わたしもこの10年を無駄に過ごしてきたわけじゃないし、獣除けの対策はいくつかあるから……でもそうだなあ、わたしたちの命を狙うような凶暴な生き物は熊やグリフォンくらいじゃないかな？」

「熊とグリフォン、か」

イオの言葉におもわず渋面をつくってしまう。

熊は分かる、だつて元の世界にもいたから。……だがグリフォンは埒外すぎではないか。姿形も教えてもらったが、空想上のグリフォンのまんまだった。

いや、グリフォンの存在を疑っている訳ではない。グリフォンの近縁種だという、グリフォンに比べれば温厚なヒポグリフならば何度か空を滑空しているのをこの目で見たことがある。

あの時は目が異世界という環境の変化でついに頭がやられたのかと心配になったものだ。

「でもそこら辺は大丈夫かな。熊は鈴を持っていけばいいし、ヒポグリフの縄張りを通るか獣避けがあればグリフォンは寄ってこないし」  
「そうか。問題なさそうか」

「うん。あとは……あつ、……ちよつと眉唾だけど一つだけ……」  
「ん。どんなやつだ？」

「ホントに眉唾なんだよ？ 出会う確率なんて0に等しいけど、でも熊やグリフォンなんて目じやないくらい強力な存在」

イオが声はどんどんか細くなつていった。どこか怯えと畏れに威圧されるように……息をひそめるような声。

「熊の危険度が10だとして、グリフォンは30くらい……でもその存在は数字では表せないくらい。出会ったら見逃してくれることを祈るしかないような……そんな存在」

「そんな天災じみた奴がいるのか……？」

「うん。わたし自身見たこともないんだけど、お母さんの手記に少しだけ載つてたの……」

「そいつの名は？」

「——『まつろわぬ神』」

かすれ、ささやく、声だった。

「神……？」

「うん。それはとても怖ろしい存在。……昔は良い神様だったらしいんだけど、時を経て変質していつて、悪い神様になつちやっただつて」

「……」

なんて言えばいいのか判断が付かなかつた。ありえないと笑い飛ばせばいいのか、イオと同じように恐れればいいのか。

「ふふ、脅かしすぎちゃったかな。でも大丈夫だとおもうよ？ ただ手記に書いてあつただけだから本当に居るのかなんて怪しいし、わたし達の前に現れるなんてもつと怪しいし」

「そうだな」

確かに眉唾だった。『神』は居るといふ前提を置いてそんな者がいれば、太刀打ちできないのは明らかだ。

まつろわぬ神……まつろわぬ事のない神、か。頭の中で単語を転が

す。

まつろわぬとはどう言う意味なのだろう。平安時代に存在したまつろわぬ民とは朝廷に従わない民を指した。

であれば『神』の場合は？ イオたちの一族に従わないからまつろわぬと評したのか？ それとも彼らイオたち一族固有の宗教観念から？

神話は好きだから読み漁っていたが少なくともそんな言葉初めて聞いた。でも異世界なのだ……もしかしたら神様だって存在している、たしかに実感できるからこそその元の世界にはない特異な表現を使っただのかも知れない。

謎は深まるばかりだった。

ただ、その単語を聞いてから、胸の奥底が妙にざわついて仕方がなかった。

「大丈夫だよタカシ、神様には私が毎日お祈りしてるもの。襲われるどころか助けてくれるよ」

「そうか。それもそうだな」

「ふふ。……日が暮れてきたね。タカシ、今日もお願いしていい？」

「ああ」

ほほえむ彼女の手を取って、いつもの丘に向かいはじめた。

さつきまでの疑問は思考の奥底に沈んで、いつの間にか消えた。

ふと仰いだそらには無数の綺羅星がかがやいて、静かな丘に座りこむ小さな二人を見下ろしていた。

丘は星明かりでそこらを駆けまわれそうなほど明るく……けれど口からは白い息がもれて鼻先をツンと刺すような肌寒さがあった。

昼には春の温かさが満ちるこの場所も、夜となれば話は別だ。この気温の差、正しく春なのだろう。

手早く準備する。

「ほら、イオ」

火で温めた飲み物……イオが以前から作っていたという蜂蜜酒



……を差し出す。これがあるのとないのでは身体の暖まり方が段違いなのだ。

「ありがとうタカシ。……ん、久しぶりに飲んだけど、おいしいよねこれ。身体もぽかぽか温まるからどうしても眠れないときはこっそり飲んでるんだ」

「そうか」

二人の胃が満たされるまで、しばし和やかな時間が流れた。その頃にはさつきまでの肌寒さはどこへやら、満腹感とともに心地の良い熱が体内に宿っていた。

「……お祭りってどんな感じなのかな」

脈絡のない唐突な問いかけだった。見ればイオはコツプの湖面に映った水鏡に視線を揺らしていた。もしかすると独り言だったのかもしれない。

「お母さんの手記にはたくさんの事が書いてあるけど、分からない事も多かったんだ……。お裁縫も、料理も、声が教えてくれることも、一人でできるものなら何でもやったよ。……でも、お祭りも、友達も、他の人がいないとできないことは今まで何もできなかったから。……分かんないんだよ」

ああ、そうか。イオはこれまで孤独な生活をおくっていたから……。

イオを気遣うように小さく笑う。笑うなんて不慣れすぎて引き攣っていたのは自覚していた。

「二人だけの、いまでも、十分お祭りだ」

「ふふ……だったら嬉しい」

こちらの答えに満足したのだろうかイオはほほえみ家から持ってきた風呂敷を解くと、六弦の豎琴を出した。

音楽の教科書にでも載っていそうな古風なリユート。

「下手だけどゴメンね」というイオ。とんでもない、と首を振って否定する。

何度か聞いたことがあるがイオの演奏と歌声は素晴らしい。その歌声はニユンペーかセイレーンさながらで、また聞けるのかと鼓動が

にわかに活気付きさえた。

おいで雛よ、生まれ落ちた我が子よ。

羽根も持たぬおまえが業を忘れて何処へ行く？

あの白き頂きへ、小さな小さな素足で歩いて来なさい。

曲は何度か聞いたことのあるものだった……あるいはこの曲しか知らないのかもしれない。

だが一度聞いたからといって色褪せるものでもない。

聞き惚れていると、無意識のうちに、いつの間にか口遊んでいた。

歌声に宿る魔性がそうさせたのだろうか。……ずっとずっと一人で歌っていた少女に、少しでもいいから寄り添いたかったのかも知れない。

歌は一度聞けば記憶に焼き付いてしまうから歌詞やリズムに問題はなかった。決して歌が上手いわけじゃないから、この旋律を汚してしまわないか。そちらの方がよっぽど心配だった。

いきなり歌いだした観客に目をまるくしたイオだったがすぐにうれしそうに笑った。

二人の奏でる曲は、最初に歌っていた曲に留まらなかった。

楽しい歌、悲しい歌……旋律が分からないときは導いてもらって、今度はこちらが歌い返して導いて、不思議なことに歌詞も旋律もなにもかもめちやくちやだったというのの一つの曲として体を為していたから奇妙だった。

ひとしきり演奏が終わると、星明かりに照らされた少女はしつとりと微笑んだ。

「……ありがとうタカシ。あなたが来てくれたお蔭で前よりずっと楽しい。人となにかをする事がこんなにもドキドキするなんて知らなかった」

星明かりに照らされた彼女はそら恐ろしいほど綺麗だった……今にも霞となって消えてしまいそうなほど。

それが潮騒のごとく胸を騒がせた。

「大丈夫。イオもこれからもつと沢山の人に出会って、もつと沢山の楽しみを見つけていけばいい。焦らなくても、いつか外に出てればすぐにできる」

その胸騒ぎのせいだろうか。普段より舌はなめらかに動いた。

「楽しそう！　ねえねえ、外にはどんな人が居るの？　私でもタカシみたいにお友達になれるかな？」

「できる。少なくとも俺の幼馴染みなら保証する。全員子供の頃から共にいる気のいい奴らだ」

「あつ、そつか……私と会う前からずつと一緒にいたんだ……」

「ん……どうかしたか？」

「ううん、なんでもなーい」

「……？」

少し拗ねたようなイオに少し困惑する。どうにかせねば、混乱した思考のなか、とある質問が飛び出した。

「そ、そうダイオ。もし、もしだぞ。俺の元の世界に帰る手段が見付かったとして、君は俺に付いてきてくれるか？」

「……え。私が、タカシと？」

「ああ。それも今すぐ」

なにを口走ってるんだこのコミュ障は。そう自分をぶん殴りたかったが、もう止まれない。……それに気になつてはいたことでもあった。

「……う、うくん……それは、無理かな……？　いままで過ごしてきた場所をそんなすぐには変えられないよ……羊たちの世話もあるしね？」

「……そ、そうか」

少し、いや、かなりショックだった。イオなら、と思い込んでいた。でもそれはただの思い上がりで……今までの生活基盤を放り投げてまで付いてくる人なんて早々いるはずもないと考えなくても判ることだった。

そんなものを所有物にしか思っていない証左じゃないか……問いかけの答えも己の愚かさも、二重でショックだった。

「それにここで頑張るのをやめちゃったら、お母さんにも胸を張って会えなくなっちゃうもん。ごめんね？」

「いや謝らないでくれ。俺こそ君のことを考えていなかった、すまない」

「いいよ。たぶん私に何もなかったら、タカシに付いてってると思うし」

「そ、そうか」

「でもそうだなあ……。いつか……。頑張って頑張って、お母さんに会うことができたのなら……。タカシの世界に行ってみてもいいかな」

「……それは、遠いな」

「ごめんね？ でもわたしはそのために今日この時までずっと頑張ってきたから。それを水の泡にはできないよ」

「そう、か」

我も人彼も人。彼女も一人の人間なのだ。それをひどく実感した。それに可能性は0じゃない。……。そう思いたかった。

「そう言えば山の向こうにイオの母がいて待っていると手記に書いてあるのか？」

「え？ ……ううん、手記には頑張りなさいってしか書いてないの。会えるって教えてくれたのは降ってくる声だよ」

「声が、か」

「でも間違っ居ないと思う……。だってお母さんは死んでないんだよ？ だからこうして声をかけてくれるんだし、だったら今はどんなに遠くにいたとしても、私は胸を張って会えるよう、自慢の娘だって言ってもらえるように頑張るだけだよ」

言い切った声は、意志のこもった強い声だった。

心臓の鼓動が強く脈打った。母に会いたいと願うイオがひどくまぶしくて仕方がなかった。

「そんなにも、か」

「そんなにも、だよ」

「……分からない。俺は親にそこまでの感情を抱いたことがない。だからイオが会いたいと強く思う源泉が分からないんだ」

「あはは、タカシってば変なこと聞くね。——理由なんて、あるわけないよ」

「理由が、ない……？」

「だって子供が親に会いたいわって自然なことでしょう？ わたし、タカシみたいに外のことなんて知らないけど、それだけは分かるよ？」

「ああ……そうか、そうだよな。」

目から鱗が落ちる、という経験をこの時はじめて体験だろうと後になつて思った。

けれど、いまこの時はただ、未知の知識を突然与えられた子供のようにぼかんと忘我することしかできなかつた。

世間知らずだと思つていたイオが、「おかしなタカシ」とクスクス笑っているイオが、何十倍も常識的で、成熟していて、とても眩しく見えた。

同時に気付いた。

なんで自分が元の世界に帰ろうと躍起になつていないのか……いや、躍起になれないのかが。

そうだ……森から出られないと知つた時のもつとなりふり構わず行動しても良かったはずだ。迷いの森があるなら森を切り倒して切り拓けば良かった。山火事でも起こして活路を見出そうとしても良かった。

……でもやらなかつた。

ここに手がかりがないと悟つたのならイオの家を飛び出して、一人だけ探索して回つてもよかつたのだ。

……でもやらなかつた理由。それは——

——焦がれていた母親と再会するイオが見たかつたんだ。

それが正木隆という己が、根つこのところで求めていた物。

それが親殺しでありながら、親とは会つたこともない己の無意識に抱いていた渴望だったのだろう。

——ここから先は全て人づてに聞いた話だ。

どうやら俺は短命の家系らしい。

というのも母方は代々身体が弱く母が中学に上がるころには妹以外みんな病で死んでしまうほどには虚弱な家系だったそう。

そして父の方なんてそもそも天涯孤独の人だったらしく父が死んだ今では確かめようがないが、どちらにせよ両家とも身体の強さや運、それらを加味しても20代を越えられない者がざらだったらしい。

話に聞く父は要領は悪かったが情の強い人で、母の方は周囲が呆れるほどお人好しだったという話だ。ふたりとも辛い境遇に嘆くでも怒るでもなく、日々を精一杯生きていける強い人たちだったらしい。

お互い身寄りのない者同士で似た境遇の二人だったから惹かれるものがあつたみたいで、運命的な出逢いのあと一週間と経たずに付き合いはじめた。そしてまだ20歳にもならない身空で結婚し、俺を身籠ったそう。

まだまだ若いふたりには壮絶な苦労があつて、……でも幸せそうだったらしい。

けれど、幸せな時間は長くは続かなかつた……だって、俺がいたから。

俺は巨軀だ。

まだ14だがもう身長は180を超えてる。それは赤ん坊のころから変わらない……臨月のころには平均体重を遥かに上回って8kgを超えていたって話だ。いわゆる巨大児だったらしい。

そしてそんな難産に身体の弱い母が耐えられるわけなかった。帝王切開に踏み切ったが、結局、母は俺を生んですぐに亡くなり、その数日後、後を追うように父も事故で亡くなった。

……ゆえに、親殺し。

唯一の親族で俺を引き取ってくれた伯母は、たしかに育ててはくれたが幼少のころから随分と罵られた。

お前さえ、お前さえ。何度も聞いた言葉。

たぶん、一度も名前を呼んでもらったことはなかったと思う。仕方のない事だと分かっていたが、辛くなかったと言えば嘘になる。

伯母の工作は徹底していた。

父や母の写った写真はもとより名前の記された公共施設の新聞すらくり抜いて、いつそ病的なまでに遠ざけていた。

まあ小学校に上がるころにはそういうものなのだと受け入れていたのだが。

もう諦めてずいぶんと経つが、けれど親の顔くらい見たかった。……まかり間違っても殺したくて殺した訳じゃない。

立ち往生、八方塞がり、袋小路、どうしようもなくてにっちもさっちもいかない……そんな状況は人が生きている中で必ず訪れる場面だ。

だけど独りじゃどうしようもない時は往々にしてあるもの。

そんな時、人はどんな行動をとるだろうか？ 決まっている、誰かに助けを求めればいいのだ。

無条件で手を差し伸べてくれる家族に。

頼り甲斐のある友人に嘆願して助力を乞うて。

ともすればそんな存在なんていなくて神様に縋って。

そしてそれは俺も変わらない。

俺の場合は三つ目、それも神様ではなく物語の英雄に救いを求めた。英雄に憧れた理由はこんな所だ。

そしていつの間にか英雄になりたいと願っていた。

英雄に救われた者として誰かの救いになりたいと思うの可怪しいだろうか。

再度言うが、俺だって普通の人生が選べるならそっちが良かった。子供が思い浮かべるような夢にいつまでも縋っていたくはなかった。

親が、欲しかった。

だからこそ、イオと俺は同じ穴のムジナだった。

だからこそ、イオのひたむきに母を求める姿は心を打った。

だからこそ、両親を失った者同士、可能性があるのなら手を貸したかった。

そう思うと不思議なほどずるりと納得することができて。今度は  
なんの気負いもなく言葉出てきた。

「イオ——君がお母さんに会えるのを手伝いたい……そして許される  
なら再会した姿を見届けさせてほしい」

流暢に紡いだ言の葉に、イオは驚いたように目を瞠って次には俺の  
手を取ってその豊かな胸に掻き抱いた。

「ほんとー！　ありがとう嬉しい！　さつき歌を歌うのだから二人だつ  
たらこんなにも楽しくて仕方なかったのに、タカシが手伝ってくれる  
ならすぐお母さんにだって会えるよ！」

星光の照らす丘で爛漫に笑う少女はこの世の者と思えぬほど美し  
かった。俺の手を取った彼女は柔らかく微笑みつづけて……

ああ……今なら誓えるはずだった。いや、今こそ誓ってやる、不朽  
不滅の誓いを。

俺とイオにこんな運命しか寄りかきなかったクソツタレな神様に  
だって誓ってやるよ。

——俺は彼女を守る。

果たせなかったことをイオにやって欲しいから。誰がなんと言お  
うと俺は決めた。

イオが嫌だっていつでも付いて行ってやる。

迷いこんだこの世界は正直言って普通じゃない……イオがいなけ  
りや訳が分からなくてアタマがおかしくなっていた。できるなら一  
刻も早く出ていきたい。でも、そんな所に彼女ひとり置いていくのか  
？　……論外だろ。

俺が帰ることなんて彼女の物語を見届けるまで無期限延期でいい。  
俺は最期まで見届けたい。心の底からそう思ったんだ。

「あつ。でもタカシだって帰りたいでしょ？　私も手伝うよ……タカ  
シが私を手伝ってくれるみたい」

断言する。イオは「人」じゃない。

青い髪。

長い耳。

壮絶な美貌。



異能の数々。

特殊な生い立ち。

ずらりと並べられたもののどれを取っても人の枠組みには当てはめられないもの。けれど……

だから、どうした。

こんなクソの役にも立たないでくの坊の言葉にだって、イオはとびつきりの笑顔を浮かべて……手を握ってくれて。それだけで、救われたような気がするのに——

「二緒に頑張ろう、タカシ」

——ああ。この時、この瞬間、この刹那。

本当の意味でイオ・リュビエーという少女に“恋”をしたのだから。

### 第3話

けれど誓いとは裏腹にイオの容態は刻一刻と悪化していった。切り取られた草花のごとく彼女はみるみると衰弱するばかりだった。

その衰弱の速さは坂を転げ落ちていくようで、まだよろけながらも歩いていた丘の日からたったの4日で発熱も咳もないというのに最低限の生命を維持すること以外不可能となった。

まるで植物人間。

もはやベッドから起き上がる事すらできないイオを放って置ける訳もなくあの日以来、丘を訪れる事も、狩りをする事もせず、彼女の傍に居続けていた。

無力だった。ひたすらに。

こんな運命しか用意しない『神』なんてものに誓ってしまったのがそもそも間違いだったのだろうか。

ベッドの横でそう臍を噛むように顔を顰めて、医療の知識も経験もなく、医者なんてとてもではないこの孤毒で無力感に苛まれつづけるしかなかった。

ベッドに横たわるイオは意識の覚醒も時を経るごとに短くなっていく。時折、目を醒まそうと「お母さんが待ってる」「行かなきゃいけない」そんな謔言を繰り返し、死んだ様に眠った。

地獄だった。変わるものなら変わりたい。

でもどうすることもできず、ただ彼女のとなりに居続けるほか、なかった。

「……………タカシ……………」

「イオッ、起きたのか!」

うつすらと目蓋を開けたイオに思わず身を乗り出してしまう。彼女を慮って驚かすような挙動は控えるべきだったが最後に彼女が目を覚ましてから2日が経っていて、抑えられなかった。

「なにかして欲しいことはあるか? 水、飲むか? それとも……………」

「……………ごめんね……………」

脈絡のないささやき声に閉口する。と同時に手の甲に冷たい感触が伝わった。

氷のように冷え切ったイオの手が、握りしめていた拳に重ねられたのだ。

「わたしは……大丈夫だから」

カゲロウよりも弱々しく思えるほどになったイオは、大丈夫、大丈夫……そう何度もくり返して、声量は小さく小さくなっていき、また意識を失った。

「はは」

笑いが漏れた。ひどく乾いた笑い声。

なんだ、これは。

何かが碎ける音が口腔から響く。気付けば奥歯が碎けていた。

堪らず立ち上がって、外に出た。玄関のドアを閉めた瞬間、なりふり構わず全力で駆け出していた。

目的地なんてない、ただあの場所に居ればそのまま家をぶち壊してしまう。そう思ったから、離れなければならなかった。

「クソツタレ！ クソツタレツ！ クソツタレエエエツ！」

喉よ破れよと底なしの怒りから湧き出た罵声を吼えたくり、目に付いたあらゆる物を叩き壊していった。木も、岩も、鹿も、熊も、生命も無機物も関係はなかった。手当たり次第に殴りかかって、原型を留めなくなったら、まだ別のものに殴りかかった。息切れする気配も、痛みすら感じる事はなくて、赤熱した思考は濁流さながらの破壊衝動を満たすことだけを求めた。

獣だった。そこに憧れていた英雄像なんてありはせず無慈悲な理不尽にただ癩癩を起して暴れまわることしかできない。

「ガアアアアアアアアア!!!」

怒号とともにどこかのなにかへ右拳を叩き込む。固い物を殴った感触。

「なにが……なにが英雄だッ！」

今度は左拳。殴った痛みはなくて、ただ強く握った拳が熱くて堪らなかった。

「自惚れも大概にしろ！ 人ひとり……好きな子ひとり救えなくてなにが英雄！ 後悔の数だけチャンスはあったのに……何もしなかった役立たずの木偶の坊が！ 冷めたふりして斜に構えて、無能がバレるのが怖かったただけだろうが！ なんの役にも立たない屑がア！ 死ね死ね死んでしまえ!!!」

口汚く何も為すことのできなかった己を罵る。もうそれしかもうできなかったから。

元の世界にいたとき彼女を救う、糧や経験を得ていれば……。あの情報と科学で満ち満ちた世界だったならば何らかの手段はあったかも知れない。

だが何も持たない己の選択肢は0で、剥き出しになった感情を暴力で発散させるだけしかできない。

「誰か、助けてくれ……」

力尽きたようにくずおれ、いつかの幼き頃のように英雄に縋るしかなかった。

パラパラと砕かれた破片が頭上から降ってきた。

見ればここはいつもの丘で、今まで殴っていたものは丘に鎮座する大岩だった。どうやらそこかしこを駆けずり回ってここまでたどり着いたらしい。

何十何百と殴打した大岩はひび割れ、今にも粉々に砕けそうな状態だった。

本当に自分がやったのか、と乾いた笑いが漏れた。

ただのバケモノじゃないか。

自重するように笑う。白熱した本能のままに行動して、火事場の馬鹿力だろうが人並み以上の膂力で破壊して回っていた自分は、よくよく考えなくてもバケモノ以外の何物でもなかった。

その時だった。

大岩がまた崩れ、中から何かが見えたのは。

「ん……？」

$\Phi$ ?  $\gamma \varepsilon \alpha \pi$ ?  $\varepsilon \delta$ ?

なんだ？

大半が岩に覆われ見えないが亀裂の入った大岩の隙間から文字が見え隠れしている。文字は読むことはできないがイオの持つ手記と似たような形をしていた。

殴打した衝撃で脆弱になったいた岩を剥がしていく。どうやら大岩に見えていた物はゆで卵のように中の物を覆う殻だったようで、中から人が入れるほどのつるりとした球体が出てきた。

『——驚きました。扉を封印するために覆っていたあの外殻を拳だけで破壊するとは』

「ツ！ 誰だ！」

誰何の声とともに声の方向に視線を向ける。そこにいた声の主は、美しい女性だった。

年のころは20代前半だろうか？ 青い髪に、尖った耳……イオと同様の特徴と白皙の美貌をもった女性だった。

だが特筆すべきはそこではない……イオにもないような特異なものがある女性にはあった。

「幽霊……？」

思わず自失したかのように声を漏らしてしまった。なにせ突然現れた女性は、幽霊さながらに姿が透けていたのだから。

戸惑う俺をよそに半透明の女性は、口を開いた。

『初めまして正木隆。私はあなたをこの世界に招き入れた者です』

「アンタが俺を……？」

『ええ。本来であればあなたの前に現れるつもりはなかったのですが……このような仕儀となれば致し方ありません』

砕け散った大岩の残骸を見やり、その女性はすこしだけ呆れた気配を覗かせた。けれどそれも一瞬、すぐにこちらへ強い意志の籠もった視線を投げかけた。

『あなたをここへ招き入れたのは、ひとつの願いを叶えてほしいが為でした』

「……願いを？」

『はい。……イオを連れてこの牢獄から逃げてほしい。それが私の望みにして、あなたをここへ呼んだ理由』

真摯な眼差しを送る女性は、嘘を付いている様子も罫に嵌める様子も感じ取れなかった。感じ取れたのは強い決意と温かいものだけ。そしてハッと気付いた。目の前の女性の顔は誰かの面影が強くあることに……。

「まさかアンタは……いや、あなたは——！」

『ええ……私はリライア・リュビエー。イオ・リュビエーの母です——』

かつん、かつん、と足音のみが響き渡る回廊は寒気がするほど伽藍堂で一切の虚飾がなかった。己以外、音を発する者のいない無音の世界。いつそ血流のさざめく音どころか、筋肉の収縮や関節の音さえ聞こえてくるほどここは静かだった。

——神殿。

手記によれば大昔のリュビエー族が建造したというこの神殿は、切り立った山々のなかでも一番高い山を掘り進められて作られたらしい。場所は地面のなかにあれどその高度からすれば空中神殿と呼んでもおかしくない。

回廊は不思議な事にどこかうすぼんやりと辺りを照らし、己の全身を覆った外套から伸びる青い髪さながらに淡い青が行く先を示していた。

どこかから切り出した石を巧みに敷き詰めたこの石造りの荘厳な神殿こそ『神』が御坐す場所なのだという。

神殿内部の神聖な様相とは裏腹に構造はひどく簡単なもので、神殿はただただ大きな一本道が伸びるばかりで迷いようがなかった。

終点である一本道の先には数十メートルはありそうな扉……いや、門が鎮座していた。

その中からは隠し切れない強大な気配をひしひしと感じる。

この先に居るのだ……真なる『神』と呼ばれるもの。真なる力の具現。すべての元凶——『まつろわぬ神』が。

門の前に立てば手を触れるより早く、ゆつくりと持ち上がっていき。その様相は巨大なアギトが開く姿を連想させた。

退くわけにはいかない。

一歩、また一歩、と踏み出した。

神殿の深奥は、先ほどまでの荘厳さとは打って変わって簡素なものだった。

さつきまでの人工的な匂いを限界まで消し去った空間。敷き詰められた石はここだけ剥ぎ取られたように土が顔を出し、最奥にある石造りの玉座のみが神殿を思い起こさせるよすがであった。

——そしてその玉座に、彼はいた。

玉座に腰掛けた、巨大な壮年の巨漢。

手入れとは無縁そうな蓬髪と、顔の下半分を覆うみごとなひげが印象的な、野性味のある容貌だった。

身長はおそらく十五メートルを超える。見上げるほどの大巨人。

たくましく均整の取れた肉体は隆々と盛り上がる巖のような筋肉に覆われ、見ているだけで圧倒されてしまう。

彼の肉体はどこまでも雄々しく、いかめしく、そして神々しい。ごく粗末な衣装——薄米口布と革の胸当て、すり切れたマントしか身につけていないというのに、おそろしいほどの威厳があった。

向き合うだけでひざまずき、頭を垂れなくなってしまう。

「現れたか、最後の聖餐たる乙女よ」

豪放磊落なユーモアを感じさせる声。だが一度機嫌を損ねれば、すぐさま激情に駆られて暴れだしてもおかしくなさそうな——嵐の前の凧にも似た声。

そして、どうしようもなく喜色が入り交じった声だった。

「……あなたが『まつろわぬ神』……そして、この馬鹿げた儀式をはじめた御方……なのですね」

「フ——そう言ってくれるな聖餐よ。わしは復讐せねばならん。あの忌々しい魔女めに」

「魔女、に御座いますか」

「そうだ。かつてわしが神霊として現世を彷徨っておったときのこ

と。あの忌々しい神殺しの魔女めが放った穴に吞まれ、此処に迷い込んでしまったのだ。全く忌々しい……此処で溜めこんだ300年余もの飢えと倦怠、晴してやらねばわしの気が済まぬ」

言葉の内容には理解できない点が多々あったが、凧いだ声には尋常の者には決して発しえない狂気的な色があつた。

こんな場所へ押し込められた恥辱と憤怒、人には言い表せないその感情は、だけど何故か既視感があつた。

「永かつたぞ……我が屈辱の日々！ あの未熟な神殺しと引き分け、肉体を失い、霊体となつたわしはそこらの神獣にすら劣る存在となつた！ 為す術なくあの魔女の術に吞まれるほどに！ だがそれも今日という日に終わる！」

地を揺らす声は泰然とした山さながらでありながら噴火直前の活火山のような危うさがあつた。今の言葉を鑑みるにおそらくこの『神』は大昔の戦いで傷付き、長い時間を掛けてそれを癒やしていたのだろう……今日の今日まで。

「さて、わしの名を知っているか聖餐よ？ 名乗らねばならぬか？

それとも貴様には遙か遠き異界に伝わる古き王の名をそらんじる賢者であるか？ さあ、いずれだ？」

「……存じております。御身の御名は、■■■■であられますね」

「ほう！ 異界との関わりが断たれてなお、わしの名を知りえる者が居たか！ これは愉快！ 愉快よ！ 貴様に聖餐としての役目がなければ我が手元におき格別の加護を施しただろうな！ ハハハハハ!!!」

愉快でたまらない。神々の王者たる者の哄笑は比喻抜きに床を、壁を、大地を、山を鳴動させた。

「さて、最後の聖餐にして我が名を看破した賢者よ。貴様ほどの智慧があるならばこれまで行われてきた儀式の意味を知らぬはずがあるまい？」

賢者、と称えながらもその視線は蟻や路傍の石を眺めるそれであつた。己と目の前の存在との隔絶としたものが浮き彫りにしたかのよう。



「我が一族を喰らい、御身が力を取り戻す為……」

「そうだ！ 此処に迷いこみ貴様ら一族が居たことこそ僥倖であったぞ！ これを以って復活せよとの我が父祖たる天の意志に違いないと感じ入ったものよ！」

「……………」

「かつては雨と大地の地母神であった神祖の裔たる貴様らはわしの良い滋養となったぞ……こうしてあと一步で『神』として復権できるほどに！」

「……………」

「おぬしらの一族は女人しか生まれぬ女系の一族ゆえ、たびたび異界に穴を空けては男を呼び込んだりしたものよ……クク、貴様の頭蓋に度々声を落としていたのもわしよ……貴様らが贄としての質を落とさぬ為にな！」

王者たるわしが小賢しい策を施さねばならなかったのは屈辱であったが……どうやらそれも実ったらしい。貴様は贄として至純の輝きを放っておるわ！」

止めだった。

あの声は……母だと思っていた声は……目の前で哄笑する『まつろわぬ神』のものだった……。

では、わたしは、なんのために——？

「最後に貴様を呑み込み、わしはかつての力と権威を取り戻す！ なあに不安がることはない最後の聖餐よ！ 貴様もまたすぐに同じところに送ってやろう！ ハハハ！」

会えると信じていたものは欺瞞だった。今まで信じ、縋っていたものは……山の向こうに安住の地があるという言い伝えは……母に会えるという希望は、砂上の楼閣のごとくに消え去った……。

終わりだった。弱り切った身体に鞭打って、一縷の望みを賭け、精神力だけで支えていたココロが今、折れた。

限界を迎えたようにブツリと意識が断裂し——

「——そんなこと全て知っている」

はらり、と外套のフードから伸びていた青い髪が落ちた。その瞬間、折れた心は刀剣の如き強さとしなやかさを以って再誕した……まるで入れ替わったかのように。

「——貴様……我に奉げられた乙女などではないな」

愉快気だった『まつろわぬ神』は打って変わって底冷えするほどの冷たい声音で問いかけた。投げかけられた問いに口角を吊り上げる。

そう、俺はイオでも、リュビエーの一族でもない。

俺はタカシ、ただの人間。

ここに至るまでに己自身に暗示を掛けたのだ……なにせここは精神が遙かに上位にくる世界。己を騙し切ればこんな芸当も可能なんだ。

「此処にお前の欲する贄などいない」

さあ始めよう。クソツタレな運命に反逆する時が来た。

「贄となるには当然、生きた者でなければ意味はない。しかしここに

——生者はいないぞ」

走っていた。イオの母だという女性から受け取った真実を握りしめて。

イオの母に会ったという事実と、イオの母が語った話はあまりにも衝撃的で……一刻も早くイオに伝えなければならぬと、猛然と駆けていた。

「イオ！ 君の母に——ッ！」

家の扉を開け放ち、前のめりになりながらベッドに駆け寄った。だが威勢の良い声は尻すぼみに消えていった……なにせベッドはもぬけの殻でイオの姿はどこにもなかったのだから。

イオッ！

背筋をとてつもない怖気が走った。弾かれたように踵をかえし、家を飛び出す。身を焼く自責の念がどうしようもなく腹の中でのたう

ち蟠っていた。

予想に反してイオはすぐに見つかった。よくよく考えなくても彼女は重篤な状態だったのだ……そう遠くへ行けるはずもなかった。

見つけた先は、水を汲んだり釣りをして魚を獲る小川。そこでイオは水浴びをしていた。

その姿はギリシャ神話に出てくるニウンペーさながらで……見て取った瞬間、岩になった様に固まってしまった。あまりの凄絶な美しさに、魂を抜かれたすら錯覚してしまう。

例えようもなく美しい……けれど今にも折れそうなほど弱々しかった。美人薄命という故事があるように、閃光さながら煌きとともに一瞬で散ってしまいそうな儂さが同居していた。

おいで雛よ、定めを担う我が子らよ。

清廉にして白痴なる少女が歩む道は一つだけ。

この世すべての風と慈雨が生まれる場所でひとり王が待つ。

イオの水面を揺らめかすような声が、真実、おだやかな川を震わせていた。水浴びと唄はいつの間にか踊りと変わっていった。躍動する彼女の肢体は途方もなく美しくありながら、けれど、そういった情念からは遠く切り離されたところにあった。

昔、幼いころに見た「巫舞」を思い出してしまう……神前で清らかな乙女が神に奉げる神楽を。……いま視界に納まる光景を見ると、なるほど巫舞のそれであった。

神聖な踊りのなかには、思考すら奪い取る魔性が宿っていて、水辺で踊る乙女はいまにも水の衣を纏ってしまいそうほど……いや、本当に水を纏っていないか？

気付けば生唾を嚙下していた。

水を纏うどころかイオを中心に驟雨が降りはじめ、水の上を歩いていたのだから——ッ！

一も二もなく足が水浸しになることも構わず川に飛び込み、どこまでも飛んでいきそうなイオを抱く。身体に伝わる温度は氷細工でも

抱きしめているように冷たかった。

認めるか！ 熱を分け与える気持ちで少女を抱きしめる。虚ろだったイオが瞬いたあと瞳に光がもどって、そこで彼女が我に返ったように見えた。

フツと糸が切れたように力の抜けたイオを全身で受け止め、彼女が痛くならない限界まで強くつよく胸に搔き抱いた。

「あ……タカシ………ごめんね、わたしどうかしちゃった」

「——違う！ イオは何もおかしくない！ おかしくなんてない！」

「どうしたのタカシ……怖いよ……？」

弱々しい声は初めて会った時の澁刺さはどこにもなくて。いまのイオは膨らみ切った風船に見えた……内からも外からも何かしらの干渉があれば一気に破裂してまう、そんな危うさをもっていた。

ガリ、と噛みしめた口腔から鉄錆びた味覚が広がり、けれどその胸中を一切表に出すことなく平静を装った。

「大丈夫。次に目が覚めた時にはすべてが終わっているから……だから、今は眠っていてくれ」

すでに消耗していたイオはその言葉がきつかけだったのか、落ちるように意識を閉じた。

その様を見届け、懐からハサミを取り出すと刃を彼女へ向け、イオの長い髪を喉元あたりで——断ち切った。

すつくと立ち上がるとイオを抱えて家のベットに寝かせ、静かに家を出た。

目指す先は丘。

正確には神が御坐す神殿につながる大岩へ、ゆつくりと歩を進めた。

辿りつくと大岩の前には、変わらずイオの母が静かに佇んでいた。こちらを視界に収めると、柳眉を逆立て厳しい視線を向けた。

『本当にきたのですね……ですが何度も言いました。イオを連れて逃げなさい。もはや大半の力を失いましたが、あなたが力を貸せばこの世界から逃げるだけの道は作れます。だから……』

「——だがイオは長く生きられない」

『……………』

「あなたが言ったんだ。いまイオが苦しんでいるのはその『まつろわぬ神』のせいなんだと。なら、俺の答えは、決まっている。虎穴に入らずんば虎児を得ず。元凶のもとへ行つて、元凶を断つだけだ。……それに逃げた先にそいつが来ないとも限らない」

静かに紡いだ言葉に、イオの母は閉口した。彼女も分かっているのだ……この状況はどうしようもない八方塞がりで、ただ諦めるか無謀な賭けに出るかしかない事は。

『もう、言葉を尽くしても意味はないのですね……』

そう諦めたように言うのと、どこからか古ぼけた指輪を取り出し、差し出した。

『あの子に渡し忘れていたものです。私ももう幾ばくもなく消えるでしょうから……すべてが終わったらあの子に上げてください。我が一族に伝わるものです』

「それはあなたがイオに……」

渡すべきだ。そう言葉が終わる前に、イオの母は首を振った。

『いいえ。もう限界が来ています』

見ればもう彼女は腰のあたりまで身体が減じていた。

『ですから一言だけ言わせてください。……我が娘のためとは言え、無関係なあなたを巻き込んで申し訳ありませんでした。私が望んだがために、冥府に帰るはずだったあなたをこのような牢獄に閉じ込めてしまったこと……』

「謝罪はいらない。俺はこれが天命なのだと察した。だから謝らないでくれ」

今度はこちらが言葉をさえぎる番だった。無言で首を振る。

『……ではどうか勝つて。そしてどうかあの子を救ってあげてください……』

「——ああ。必ず」

外套を目深にかぶって、大岩のなかへ入った。

さあ、誓いを果たす時が来た。ここから先は退くことも、失敗する

ことも、敗北することも、許されない。

手に入れるべきはただ一つ、望むものはただ一つだけ。

いぎ、神を滅ぼす修羅となれ——。

「そうだ。この世界に来る前から俺はもう——死んでいる」

俺はすでに死人。しかし、だからこそ此処に……この『まつろわぬ神』が支配する領域に入ることができた。

もともとイオの母リライアは己と己の一族の運命を知っていた。

だが最初から知っていた訳ではなくて、リライアの母と妹がしきたりを騙った『まつろわぬ神』復活の儀式の贄として神殿へ行く瞬間、過去現在未来、すべての記録があるアカシックレコードから知識を拾う「霊視」と呼ばれる奇跡によってこの馬鹿げた儀式の真実を知り得たのだという。

真実を知ったりリライアだったが時すでに遅く、二人の家族は『まつろわぬ神』の贄となってしまう。己の無力を責めたが、諦めるわけにはいかなかった。その時すでにイオを身籠っていたのだから。

この子だけは何があっても生き延びさせる。神の贄なんかにはさせない。その一心でリライアは奇跡の探求を行い、そして世界の真理を突き止めるに至った。だが突き止めた真実は過酷な現実だった。

この世界は神の創造した牢獄である——。

何度目かの絶望がリライアを襲った。

しかも『神』の創造したこの牢獄から抜け出すには尋常の方法では為す事はできず……そもそもベースとなった世界が、精神が肉体よりも上位にくる「幽世」という世界で、その中にさらに霊体が有利になる法則を敷いたのだ。

肉体をもつ彼女は圧倒的に不利であった。

だが、諦めるわけにはいかなかった。

リライアは精神体となる覚悟を決め、身命を賭した奇跡はイオが4歳になる直前に行われた。……結果は、成功。肉体は失ったが精神体

となり力を蓄えつつイオを見守る守護霊となった。

そしてイオが14歳となる少し前……儀式が行われる前に、十全な力を蓄えた彼女はこの世界に孔を開ける事に成功した。魂一つ分が入りできるだけの小さな孔を。

そして掬い上げられたのは俺の魂。そう、死んだからこそ俺は此処に立っている。

イオの母から聞いた話はこれがすべてだった。自分が死んでいると聞かされて驚くよりも、不思議と納得が勝った。

死を自覚すると靄がかかった記憶は晴れ、自分が交通事故によって死亡したことを思い出す事ができた。元の世界から此処へ来る直前の記憶がひどく曖昧だったのはそう言う訳だ。親子二代で事故死とはつくづく運がない。

そして魂となったとき偶然、目に付いたイオの母に掬われ此処に流れ着いた。俺が此処に辿り着いたのはなんの運命も奇跡もなく、ただ偶然の積み重ねだけだった。

「イオの母から教えてもらったことだ。此処は肉体よりも精神が遙かに上位にくる世界……ゆえに精神が死滅しない限り不朽不滅らしいな。」

ああ、たしかに思い当たる節はある。現に、俺が此処に訪れてから一度も怪我を負っていない」

そう。狂乱して大岩に殴りかかった時も、現実ならば拳は砕けて血まみれになるはず……けれど痛みも血も流れなる事もなかった。

俺が血を流したのは衰弱するイオを見て、途方もない無力感に苛まれたときだけ。

「つまり精神さえ無事ならばこの世界では傷を負うことはない。逆に精神さえ揺さぶれば傷を負う。」

そしてお前は法則を定めた『神』……だからこそ、お前もその枠組みから抜け出せないんだろう？」

「……ほう」

つまらなそうに話を聞いていた『まつろわぬ神』の双眸がはじめて興味を持ったように己を射貫いた。

それだけで心を千々に砕く極大のプレッシャーが降りかかる。  
これが王の中の王にして、神の中の神。

気まぐれに人を虐殺しようと世界を滅ぼそうとも許される至高の存在。矮小な人間程度、撫でるまでもなく視線を向けるだけで滅ぼすことは容易い。

——だから、なんだ。

「——おもしろい」

玉座から『まつろわぬ神』が立ち上がった。

その威容、その神気、その覇気、およそ生を受けてよりどんな物質よりも禍々しく神々しい。

山脈が隆起したかと錯覚させるほどの力強さに、心を強くあらねば跪いていたことだろう。

世に謳われる物語の英雄たちも、こんな気分だったのだろうか。

ヘラクレスが、スサノオが、ペルセウスが。

なにかを守るために立ち上がり強敵を前に彼らはどんな想いを心に秘めていたのだろうか。追体験じみた今の状況にそんな考えがふと脳裏をかすめた。

「おもしろいぞ人間！ その覚悟、その不遜、その蒙昧！ なんとという愚かさか！ 貴様は我が手ずから殺すに相応しい！」

『まつろわぬ神』の両の手に二対の棍棒が顕現した。

おそらく知識のなかにあるあの『まつろわぬ神』と同一視されていた神が所持するというヤグルシとアイムールに違いない。

あの『まつろわぬ神』もまた英雄の一柱、世界各地の英雄をさらっては読み漁っていた知識の中に刻まれていた。目の前の英雄神は竜さえ討ち果たした希代の勇者……己など及びも付かない武勇を誇る。

——だから、なんだというのだ。

『まつろわぬ神』はプライドの塊なんだろう？ そのプライドの高さが強さに直結するほどに。なら俺人間という弱者を倒せなければその自尊心は酷く傷付くんじゃないか？ そうなったお前は『神』足り得るのか？ そこに俺の勝機はある——」

「フ——愚かな。例えそうだとしても定命の運命しか持たぬ貴様に



『神』であるわしを倒せるはずがなからう」

「どうかな。此処じや精神が敗北を認めない限り、死にはしない。そして——俺が折れることはない」

なぜならこれこそが我が天命。俺が生まれた理由。己の生まれた意味を示す最大のチャンスに他ならない。

目の前には敗北必至の猛敵。だというのに心の中に悲観は微塵もなく、それどころか歓喜に打ち震えていた。

そうだ。

これが本当の“戦い”なのだ。なにも持っていなかった俺が、初めて誰かのために戦う……願って止まなかった本当の戦い。

「——故に、貴様に万に一つの勝ち目は無いぞ。バアルメルカルト……ッ！」

己が勝利は、己の為ではなく——。

## 第4話

例えどれほどの覚悟と意志をもって挑もうと、隔絶した差は覆しようもなかった。

初撃は感知不可の旋風——クロスした両腕が消失した。

二撃目は発生源不明の衝撃波——外壁に叩き潰された。

抵抗どころかまぶたを閉じる暇もなく、俺は致命傷を受けていた。

『まつろわぬ神』……メルカルトはその間、指一本うごかしてはおらず、俺はその間、指一本うごかすことができなかった。なんの冗談だ、率直な感想だった。

今の攻撃でメルカルトと俺の間に横たわるあまりにも巨大な溝をはじめで心で理解した。理解してしまった。

個の武勇でどうにかできる存在ではない……全世界の国々が総力を結集し戦いを挑もうとどうしようもないほどの存在なのだ、うすぼんやりと理解した。

まるで天災だ。

巨大隕石や大海嘯と同等のエネルギーと質量に意志を持たせた者こそが『まつろわぬ神』と、そう呼ばれる存在なのだとようやく気付いた。

これが真なる神、真なる猛威、真なる力の具現。『まつろわぬ神』――

理解とともにまだ生きていたらしい痛覚が絶叫を上げた。足には無数の石が突き刺さり太腿からオカシな方向に折れ曲がり腹は裂けはらわたがまろび出て肋骨が観音開きで心臓が剥き出しとなり両腕はそもそも存在しておらず触覚以外の五感は作動せず脳漿と脊髄が外気に曝されている感覚だけがあった。

痛い。痛い。痛い。

ふぎけるな。死んだ方がマシだ。なんでこんな事になった、なんでこんな所にいるんだ、なんのためにこんなことをしているんだ。そんな疑問が降って湧いては消えていく。

過去の自分がたまたまなく呪わしい。

喉が裂けて掠れた声で世を呪った。己の愚かさを糾弾して、神を心の底から畏れた。逃げ出したい。やりなおしたい。今すぐ許しを乞うて死を迎えたかった。

だが死の直前、霞む思考のなかで色褪せず燦然とかがやく青い光があった。

誰であろう、イオだった。

——俺は彼女を守る——

彼女の笑顔を思い出した瞬間、脳裏をひとつの記憶が駆け巡った。

あの誓いは嘘だったのか？ ささやき挑発するような問いかけが砕けた頭蓋から入り込み、脳幹から脊髄を下って全身へ遍満した。

——そんなわけがないだろう。

白い絶望に染め上げられた心が反転し赤熱した赫怒へと色を変わる。

ああ……俺は何をしようとしたのか。彼女を、イオを残して死を受け入れようとしたのか？

ふざけるなよ木偶が。俺は敗北するために此処に来たのか？

——違うだろう。

勝つために……イオを救うために俺は来た。

それが天命。そのために生まれたのだ。

だというのに何を勝手に散ろうとしていたのか。

こんな己では駄目だ。ふと悟る。

この柔弱な精神をそぎ落とさなければイオは……必ず守ると誓った少女は、無残な最期を遂げることとなるだろうから。——決して退くわけにはいかなかった。

死を迎えた己が、新たな己へ新生する。

以前ならば千々に砕けていた精神はもう小揺るぎもすることなく

——意識は、精神は……一切の揺るぎなく存在していた。

そうだ、思い出した。

この死もまた策の一つ。

強く靱やかな己を呼び起こすため。

弱く脆い己を今ここで殺し尽すため。

神に挑むに相応しい戦士生まれ変わるため、俺はあそこで死んだのだと。

ならば此処に居るのはもう弱い己ではない。さっきまで神を畏れ  
這いつくばり諦めていた己は、死んだ。

……今ここに在るのは不朽不滅の己。

だからさつき潰れた圧潰した己など己ではない……己が此処に在  
るのが何よりの証拠。故に――

「――俺はまだ生きている」

破・碎・し・た・は・ず・の・四・肢・が・よ・み・が・え・る。ふたたび己の両足は大樹の如  
く大地を踏みしめた。

意志の力による黄泉返り、という超常の世界だからこそ為し得た超  
常の御業。

元の世界では天地がひっくり返っても不可能だった事。俺も頭で  
は出来ると理解していたが、元はそんな眉唾なものからは切り離され  
た世界の住人だったから、いささか不安だったが――もう迷いはな  
くなくなった。

死なないと、死ねないとわかったから。

殺されるたびに訪れる死の恐怖は消え去った。そして俺は殺され  
続ければいいのだ……あの『まつろわぬ神』が折れるまで。

これが唯一思いついた打倒の策。

……結局、弱者である俺の取れる選択肢なんて存在せず、それゆえ  
の苦肉の策だった。だが自我を見失うほど狂気的な自己暗示と自己  
陶酔はここに実を結んだ。

「これでお前の勝機は完全に無くなった。お前が敗北を認めるまで、  
付き合ってもらおうぞ」

「戯けたことを」



【31万4419回目】

苦しい。蘇生した途端、洪水を呼び起こして水中に沈められた。と  
いつてももう慣れたもの、この殺し方で1万回は死んでいる。……け  
ど都合は良かった。精神が摩耗し疲労してしまっていたから、この  
所身動きが全くとれなかったのだ。もう意志や覚悟では誤魔化せな  
いほどに。

上下左右の平衡感覚すべてを見失いながら、擦り切れ摩耗しながら  
も、譲れないものためにふたたび意志を燃やした。

【60万2450回目】

確率はどれくらいなのだろうか？ うすぼんやりとした思考のな  
かで益体もないことを考える。

人間が神を弑する確率が寸毫でもあるとして、それはどのくらいの  
確率なのだろうか。億？ 兆？ 垓？ 那由他の彼方の先に、人  
が認識できる無量大数の果てで、その勝利を一度でも拾える事は可能  
なのだろうか。

もしかすると、そんな事は不可能なのかもしれない。イオの母も考  
えることすら馬鹿らしいという風だった。

ならこんなことをしている俺は途方もない愚か者なんだろう。――

――でも、退けない。

意志を燃やす。

【77万2978回目】

イオ。イオ。イオ。たった二週間だったけれど途方もなく幸福な  
記憶。あの日々は夢だったんじゃないか……この無間地獄にいると  
時たま疑ってしまうほどの、幸せな時間だった。

また君に逢えるだろうか、逢ってもいいのだろうか。ああ、許され

るならば、そよぐ風に靡く髪を梳きながら、そつと掬って君の匂いを  
感じたい。

なんて贅沢な願い……一目見れずとも、勝利を得ればもう今生に  
悔いはないけれど。イオ。イオ。イオ。イオ。

そこで思考が断ち切られた。衝撃とともに下半身が泣き別れして  
いた。

ああ、すまないメルカルト。お前を前にしているというのに都合の  
いい妄想に逃げていた。もうよそ見はしないさ。

【85万6412回目】

意志の回復とともに体の感覚が消失した。  
思考が断裂する瞬間、意志が迸った。

【99万9999回目】

意志の回復とともに体の感覚が消失した。  
思考が断裂する瞬間、意志が迸った。

【120万0704回目】

意志の回復とともに体の感覚が消失した。  
思考が断裂する瞬間、意志が迸った。

【204万2179回目】

倒す。奴を。

【364万6902回目】

まだ。

【5108万8700回目】

またメルカルトの手が止まった。

「もうよかろう……貴様は『神』ならぬ身でありながらよくここまでわしに健闘した……。不撓不屈の竜狩人にして雷光の化身たるメルカルトが喝采と栄誉を贈ろう。いま膝を折り、わしに仕えることを選ばば格別の加護をおぬしとあの……」

「——知っているぞバアル＝メルカルト」

やめてくれメルカルト、なんとなくその先の言葉の先は分かるよ。でも俺に慈悲を与えようとするな。疑問を抱かせるな。心を折るな。

そう嘆きながらメルカルトの遮って嘲弄するように笑い、言葉を紡ぐ。

「お前は数多の神々を統べる神王でありながらゼウスやアフラ・マズダほどの絶大な強権は振るえなかったらしいな。お前は海や大地を信仰する民を武力で制圧した遊牧民の崇める嵐の天空神、征服神や武神の輝かしい側面もあった……けれどウガリットの神々の頂点はあくまでお前の父イル、神々との会議があってもイルからの意思を伺わねばならず、また海の神である竜ヤム討伐を為す際も苦戦の連続で、勝利を得るにはコシヤル・ハシスから武器を貰い受けねばならなかった。そうだな？」

「貴様……」

「極めつけは死の神モートとの神話だ。お前は激昂するモートを怖



れ、冥府に來いという要求を唯々諾々と呑みながら身代わりの子供を作って冥府に送った。その上でモートトを殺し解決したのはお前ではなく、妹にして妻たるアナトだった。故にお前は神々のなかでも武勇ではアナトに譲る形となった。

……お前の話を知ったとき俺はな、女には頼りっぱなしの情けない奴だっと思ってたよ。だから……」

嘲弄の笑みを哄笑に変え、凄惨に笑い飛ばす。

「なあメルカルト——そんなお前に褒められても俺はこれっぽちも嬉しくはないぞ」

ふたたび殺戮が始まった。

【5億4327万3032回目】

………

【60億1935万2789回目】

意志は不思議なほど横溢していた。でも終わりのない泥沼に心はすでに壊れていて。

あと一度でも膝を屈せば、起き上がる事も指を動かす事もできなくなるだろう。

あと一度でも疑問を抱けば、なにか考える事も叶わず心が砕けてしまっただろう。

あと一度でも慈悲を投げかけられれば、意志は萎え諦めてしまっただろうから。

だからメルカルト、俺はお前が相手に良かったと思うよ。厳しい武神の放つ無慈悲なヤグルシの一撃を余すところなくその身に受けて、ふたたび意志を燃やした。

【100億3212万3719回目】

…

【1855億6821万1004回目】

…

【3兆3109億4026万回目】

心を強く持て。

小揺るぎもさせな。

☐

イオ。

☐

┌  
└

☐

「——いい加減しろオオオ！」

吼えた。俺ではなくメルカルトが。

「貴様、いつまで続けるつもりだ！ 貴様をあと何度殺せばこの茶番は終わる!? もはや時の流れは星の一生を数えるほどとなったのだぞ！ 何故擦り切れん!? 何故諦めん!?」

堪忍袋の緒が切れたように叫ぶ声は、困惑と忌避に満ち、戦い始めた威厳はどこにもなかった。

そうだろうな、まったく同感だ。俺だってこんなバカげた狂宴、やりたくもなかったしサツサと終わらせたい。でも、後ろにはイオが居るから。退けない理由があるから。勝たねばならないのだ。

メルカルトは不老不死なれどこちらの意志も不朽不滅。メルカルトには妄執じみた野心と思いがあろうと、こちらには不退転の覚悟と想いがあった。

「貴様は何度死んだと思っている!? 諦めろ！ 人間が神に勝てるものか!!」

「そうでもないさ」

そう言わないでくれ。勝算はあったんだ。一回目……あの一回目こそ、この戦いの分水嶺だった。

どれだけ此処が現実とは違う法則が敷かれていようと、己がその一端を感じようと、現実でなら即死不可避の一撃を受けて生き永らえることができるか、正直半信半疑だった。

一度、甦るまで信じられなかったさ。でも、死なないと証明された。

虎穴に入らずんば虎子を得ず。あれこそ100%敗北するはずだった状況を覆す、一手だった。俺は虎穴にはいったからこそ、勝機を見出せた。

メルカルトの失敗はあそこで俺を消せなかった事に尽きる。痛みにも死ぬことにも慣れて、今なら呼吸するより簡単によみがえる事ができる。すると、別の事にだって意識を回せる余裕が出る。たとえば己を守る盾が欲しい。そう願えば――

「そら……こちらは精度が上がったぞ」

手中には盾が存在していた。ここは精神の世界、ひどく移ろいやすく曖昧で、何も無い世界。だからこそ意志さえあるなら0を1にすることも可能な世界でもあるのだ。

「だから、どうしたアアア!!!」

どこか怖れを含んだ声でメルカルトが叫び、雷光を纏うアイムールを振りかぶって全力で投擲した。もうメルカルト自身も限界が近いようだ。明らかに精彩を欠いている、たとえ『神』であつても幾星霜の年月には摩耗するものらしい。

だったらここからの勝負は五分、根気の問題だ。いつもと変わらない。淡々と俺は意志を燃やし続けなければならない。

こんな風に――!

掲げた盾が、メルカルトの放ったアイムールの一撃を……初めて『神』の一撃を防いだ。

盾はもう取っ手しか残っておらず、骨は両腕どころか全身がグチャグチャ、肉もミンチ寸前だが防いだ。生き残った。そう、生き残った。

――この戦いのなかで初めて為した快挙だった。

それはメルカルトにとってこれ以上ない揺さぶり。

メルカルトの蔑めしい表情が崩れ、寸毫とはいえ後ずさった。それを見逃しはしなかった。

揶揄うように酷薄に、笑う。

「――気圧されたな。ただの人に」

「――ッ! ヤグルシよ! 疾く翔け、疾く飛び、疾く薙ぎ払ええええええええ!!!」

虚空から呼び出されたヤグルシ。烈風を纏う魔法の棍棒はメルカルト自慢の武器で、その絶大さは何度もこの身に浴びている。

今回はここまでか仕方がない、次だ。

そう破壊を受け入れて……——だが予想に反して衝撃が訪れることは、なかった。

驚いて見やれば、ヤグルシが俺の前で浮遊し「さっさと掴め！」と言わんばかりに柄を差し出していたのだ。思い当たる節がなくてでもまさか、と瞠目しながら訝るように問いかける

「お前、力を貸してくれるのか？」

ヤグルシ……「反撥するもの」と言う意味を持つコイツはあの強大なメルカルトですら手に負えないじゃじゃ馬らしい。メルカルトが揺らいだ瞬間、俺に寝返るほどに。たしかにヤグルシは意志持つ魔法の棍棒で、そもそもメルカルトとは違う鍛冶の神が鍛造した武器。絶対の関係ではなかったようだ。

「ツッー！」

鎌鼬が頬を裂いた。使うのか使わないのか、答えを催促しているのだ。

ああ、すまない。

ごちやごちや考えるのはよそう。力を貸してくれるのなら……活路が拓けるなら——なんでもいい!!!

手を伸ばし、柄を握りしめる。

ヤグルシはじゃじゃ馬だ、それは俺にもいえること。現に寝返ったはずの俺にでさえ器量を見せねば殺してやると言わんばかりに暴れまわりはじめた。今でも手のひらの肉が爛れ、骨さえ見えはじめた。纏う疾風に、神経が裂かれ剥かれていく。

だから、どうした——ツ!

ヤグルシを意志の力でねじ伏せる。星の一生の年月を貫いた意志にヤグルシは歓喜し、合格だと言わんばかりにいつそう情報量が増す。まったく優しくない。

だけど、今は言う通りにはしてくれるらしい。

「バカな！ ヤグルシがわしを裏切っただど!？」

まさかの裏切りにさしものメルカルトも信じられないと目を剥いた。それはこれまでの殺戮劇のなかで空前の出来事。そして、刹那の間隙が生まれた――。

「さあ、終わらせようメルカルト」

意志の力で大跳躍し、十五メートルはある背丈を飛び越してメルカルトの上を取る。

ヤグルシを振り上げ一気にメルカルトの巨体を縦一文字に――引き裂いた。重力と膂力、ヤグルシのアシストを受けた一撃はメルカルトの半身を消し飛ばしたのだ――。

明らかに致命の一撃。

たとえ『神』であろうと手の出しようもないダメージを受け、メルカルトは地に伏した。

けれど、そこに感動も達成感もなかった。

俺自身分かっていた。

この結果は己だけでは為し得なかった、と。

メルカルト自身が死ぬことに協力したからこそ為し得たのだ。例え神の振るう武器であろうと相手は『神』……どれほど凄まじい武器を振るおうと人間が突いただけでは致命傷にはならない。

では何故か。

あのととき、メルカルトの攻撃を俺が防いだとき。メルカルトは億を超え兆を超える悠久ときえ評してもいい刻の中で、一瞬とは根負けした。刹那でも敗北を認めただのだ。……それは自死を認めるに等しい事だった。

だからこそ俺はメルカルトを討てた。

それはなんとなく理解できた……それほどの長い時間、俺たちは殺し殺され、時間を共有しあったのだから。

倒れ伏したメルカルトの眼前に、俺が立ったときメルカルトは……偉大なる神王は微かに笑って。

「フ――あの草薙某といい、貴様といい……定命の者がわしを利用し、わしを相手取って、わしを討つか。……ハハハ！ 人間とは存外、強かな者たちであったか」

「ああ。今度また出会ったときは別の縁を作ろう」  
「クク、それはいい。この縁はもう御免被るわ」

——イオ。イオ。

どこか暗くてあたたかい場所で微睡みに揺れていたわたしの元にやさしげな声が届いた。イオ。イオ。どこかとおくで聞いた声。けれど思い出せなくて。もどかしくて。かなしくて。

でも、ああ、そうだ。ふと、思い出すものがあつた。わたしはこの揺り籠のなかで十年余も微睡んでいたんだ。

生まれる前からこの無明のしずかな暗やみに抱かれていた。生まれ落ちてからも変わらず、わたしをつつんでくれた無形のかいな。

わたしの一生をみまもり抱きしめてくれていたかいは、けれども今はとおく離れていて手を伸ばしてもどれだけ歩いてても、決してとどかないところにいる。もつとふれあいたくて、もつとつつまれていたかった。だからもつと近づこうとして……

——なりません。こちらへ来てはだめ。

やさしく拒まれた。

どうして？ どうしてそんなこというの？ どうしてそつちにいつてはいけないの？ 赤子のように問いかける。

真にいまのわたしは赤ん坊だった。かいなへの加護をなくして、へその緒をきられ、肌にかんじるつめたい風におどろいて泣きじゃくるだけのただの赤ん坊。

問いかげのことばに困ったように微苦笑する気配がつたわってきて、教えさとするような声がつてきた。

——母はもう役目を終えました。あなたはもう十分に育つたの。ほら、よく見てごらんなさい。

言われ、見てみれば、そこには赤ん坊の面影もない成熟し澆刺としたわたしを立てていた。なげなく、顔をゆがめながらも、自分の足で、立っていた。

自分の姿にきづくとも無形のかいなはもやのようにあつまって、わたしによく似たすがたを形づくった。

ああ、もう逝くのだ。声を聞かずとも、表情を彩ったやさしげな微笑みだけですべてを悟ってしまう。

待ってお母さん！

そうすがつて引きとめたかったのに、手を伸ばせない。足がうごかせない。声がでない。そのあいだにも淡くほほえんだ母はかすみのごとくとけて天にのぼっていく。

いや、いや、いや。

駄々っ子がするように首をふつてもどつてきてと叫びたくて。できなきて。また子どものようにうずくまっては泣きそうになった。

——泣いてはなりません……もうその涙を私は拭えませんか。それにほら、あなたはもう一人でも立てるはずですよ。

どうして？ どうしてそんなことがいえるの？ わたしにはわからないよ。

——わかりますよ。なにせ、あなたは私の自慢の娘なのですから。だから、必ず立てますとも。

こらえていた涙がこぼれ落ちなかったのが不思議なくらいやさしい声だった。

ずるい。ずるいよ。そんなこと言われたら、わたしはもう立つしかないじゃない。



——ふふ。でも大丈夫……母がいなくてもあなたには勇者が、あなたを救ってくれる英雄がいますから。

英雄、かみしめるように口の中で反芻し、思い当たる人がいた。

そうだ。たしかに彼はいた。

初めて会った誰か。初めて言葉を交わした誰か。初めて心を通わせた誰か。

抱かれていたかいなが去ったあと、すぐに彼はあらわれた。彼とつむいだ時間はひとりでいた時間に比べればほんの一滴でしかないのに、十倍にも百倍にも思える濃密な時間で。

「ありがとう」の感謝の言葉を、幾万とかさねてつんでも足りないほどの無謬の光。

突然あらわれては無知のわたしに億千万の感情を抱かせてくれたかけがえのない貴方。

数えきれないほどわたしを救いつづけてくれたすこし偏屈で唯一無二不撓不屈の大英雄。

それだけでも返しきれない恩を受けたというのに、彼はまたわたしの知らないところで救ってくれたのだと母は教えてくれた。

不可能をくつがえして。

今すぐ会いたかった。不器用な彼の傍に居たかった。帰りたい。帰らなくてはならない。

——さあ、かえりなさい……あなたを必ず守ると誓った彼のもとへ——。

うん！ うん……っ！

さようならお母さん！ さようなら！ ほんとうにありがとう……！

目を、醒ます。

まず感じたのは嗅ぎなれた部屋のおい。

生まれてからずっと住みつけている生家のおい。

その次は自分のにおいと……そして誰かのおい。  
会いたい。

一呼吸するごとに思いは募った。  
ベッドから身体を起こす。

力んだ瞬間身体のそこかしこから絶叫じみた悲鳴があがった。

蝕まれ衰弱していた身体ははまだ不自由の毒が抜けず、まともに動かせるものではない。

かまうものか。

毛布をはぎとつて、ベッドから抜け出す。

神経が灼熱にあぶられたような痛みが全身を駆けめぐる。

床に足を付け、力いっぱい立ち上がる。

ゆるゆるとなんとか立ち上がった瞬間に弱りきった身体はくずおれてしまう。

風が撫ぜるだけで痛みが走る身体には地獄の苦しみだった。

かまうものか。

彼に会うまで絶対に諦めない。

きつと彼がそうしていたように。

這ってでも、死んでも、逢いに行く。

零れ落ちそうな涙をこらえて。

—— 堇の咲き乱れる花園を歩いていた。

久しぶりに訪れた丘はあたり一面、すみれ色に染まり、空の青ささえおおい隠していた。

不枯の花びらが散っているのだ……丘全体を染め上げるほどの花吹雪がたえまなく吹いていた。

その光景はまるで牢獄に囚われていた虜囚が解放された様子さながらで。

陽光の透けるほどすい花卉の一枚いちまいが躍っているよう

だった。

ひととき大きな風が吹いた。たまらず目を瞑ってしまつて、また舞い上がったすみれに視界を遮られる。

でもそれが最後だったみたいだ。紫の花吹雪が止んだ。……するとその先に人影を見つけた。

誰であろう……会いたい会いたいと焦がれていた人だった。

「タカシ！」

「……イオ」

イオ。イオだ。タカシ。タカシだ。また出逢うことができた。何度夢見ただろう。この時を。

ここが終点だった。永遠のようで一瞬だった旅路が終わつたのだな、そう思えば鋼さながらで無感動だった胸中に万感の想いがあふれ出た。

「もう大丈夫だ」

短く告げる。

イオはその言葉にくしやりと表情をゆがめてはすべてを察しているように頷いてくれた。彼女を見ながら、ああ……報われたな、とまた想いが溢れて、不器用な笑みが浮かんだ。

ここまで来るまで無茶をしたのだろう。そこかしこが汚れ、傷付いていた。許されるならば、今すぐにでも抱きしめたかった。

「うん……！……お母さんがね、教えてくれたの……タカシがみんなみんな解決してくれたって！ わたしを救ってくれたって！ ありがとう……ありがとう……！」

そうか、あの人が。もう去つたであろう偉大な母に感謝を送り、黙祷を捧げた。あのひとのおかげで俺は彼女と出逢い救うことができた。感謝してもしきれない。親の顔を見たこともない俺にとって、初めて母というものを示した英雄にも匹敵する偉大な方だった。

だからこそ喜んでばかりはいられない。つらい現実もイオに告げなければならなかった。

「イオ。君の母は……」

「うん、わかってる。もうお母さんはどこにもいない……あの山の向こうにも……」

お母さん……！ そうつぶやくと二条の雫がほほをつたつた。

今まで堪えていたのだろう、大粒の涙がたえまなく流れ出て。

去来した想いはただ一つだった。

ああ、いま分かった気がする……！——ここにいる理由が。

彼女を救うことこそが天命だと思っていた……けれど違った。そうだ俺は——

彼女の涙を拭うために俺はここに来た——。

そう思い至ったとき。

俺はイオの前で膝を付いて、彼女の織手をとっていた。

懐からひとつの指輪をとり出す。指輪は常春の陽を浴び目に沁みるほど輝いて、この上なく彼女に相応しかった。

「君のお母さんがくれたんだ」

俺の言葉におどろいて目を丸くするイオに笑みを向ける。

いつも引き攣ったようになるけど今度はうまく、笑えただろうか。

「それでその……。俺の世界では、指輪を贈った人が受け入れてくれるなら家族になれる風習があるんだけど……」

君が良かったら……。もそもそと女々しいほど声は小さくなっていき、らしくもなく顔が火照っているのを自覚する。

……ここで躊躇うな！ 男を見せろ、正木隆！

自分で自分のケツを蹴り飛ばし、俯いていた顔を上げて何よりも愛おしいイオを見据える。心に湧く感情をバネにやっと言葉を紡いだ。彼女は受け入れてくれるだろうか。

「——家族に、なろう」

かくして不撓不屈の英雄は跪き、朝露にぬれた蕾は満開の大輪を咲

かせた。

億千万の時を経て、ふたつの影は重なり合った。

——しあわせにおなりなさい。

そよぐ風が二人を祝福していた。